

父職と子職の大きなギャップが子の社会的地位評価に与える効果

近畿大学 辻竜平

【1. 目的】

本年5月28日、川崎市の路上でスクールバスを待っていた小学生や大人が次々と包丁で刺され19人が死傷した事件があった。容疑者(51)は長年伯父夫婦と暮らしていたが、事件当時長期間就労していなかったという。『週刊文春』6月13日号によると、中学校卒業後職業訓練校に通ったのが最後で、「学歴にコンプレックスがあるようだった」と元同僚が語っている。

6月1日には、その事件を見て、息子のことを危ういと思った元農水次官の父親(76)が、ひきこもりがちな息子(44)を殺害する事件があった。容疑者は「川崎市の20人殺傷事件が頭に浮かび、息子が周囲に気概を加えないようにしようと思った」と供述したという(朝日デジタル、「元農水次官、自宅で長男刺した疑い 殺人未遂容疑で逮捕」、6月1日)。ここで1つの仮説として考えられることは、「父職と子職に大きなギャップがある場合に、ギャップがそれほど大きくない場合と比べて、子が自身について特に不遇に感じたりすることがある」ということである。

【2. 方法】

この仮説を検討するために、2015年SSM調査のデータを用いて分析する*。まず2016年版職業威信スコアをもとにして、父職威信スコア-子職(本人)威信スコアの値を算出した。この値は負の値を取るが、その後の分析のため、スコアの差からその最小値を引き、1を足した値を算出した(これを、「威信ギャップ」と呼ぶ)。次に、面接票問45「生活全般の満足度」、問46「階層5段階評価」、問47「階層10段階評価」を因子分析(最尤法)して1因子構造であることを確認し、その因子得点を算出した(これを「社会的地位評価」と呼ぶ)。そして、社会的地位評価を従属変数、威信ギャップ、本人の威信スコアを独立変数、性別、年齢、教育年数、収入に1を足して自然対数変換したものを統制変数とし、威信ギャップをフラクショナル・ポリノミアル変数とした、フラクショナル・ポリノミアル回帰分析を行った。実行には、Stata 15.1を使用した。

【3. 結果】

その結果、威信ギャップの高次項を認めず、線形の項のみとした場合には、全体として、威信ギャップが大きくなるほど、社会的地位評価が上昇した(coef = 0.00563, SE = 0.00147, $p < .001$)。

一方、威信ギャップの高次項を認めた場合(威信ギャップの3乗項と、威信ギャップの3乗 \times ln(威信ギャップ))、威信ギャップの値がおよそ75未満の場合には、社会的地位評価は上昇し、およそ75を超えると(単純な父職威信スコア-子職威信スコアの値では25を超えると)、社会的地位評価が低下した。

【4. 結論】

多項式を用いた場合について述べると、子職の威信の方が高い場合や、父職の威信がやや高い程度であれば、父職の威信が高くなるほど、子の社会的地位評価も高くなる。つまり、父親に頼れるという感覚が持てるのだろう。しかし、父職の威信が子職の威信よりもかなり大きい(およそ25以上大きい)場合には、子は、自らの社会的地位評価、すなわち、階層帰属意識や満足感を低下させることがわかった。あまりに父親が偉大に感じたりするようになると、自分のことを不甲斐なく感じたりするようになるのだろう。

* 2015年SSMデータ使用に際しては、2015年SSM調査データ管理委員会の許可を得た。